人生を変えた2年間

JICAボランティア ビフォー／アフター 95

BEFORE → AFTER

芳岡孝将さん
（モザンビーク・理数科教師・H21年度3次隊）

「子どもたちの手本になれる大人になろう」と協力隊に参加

派遣中に東日本大震災が発生。帰国後、「放課後学校」の講師として被災地に移住

派遣中に東日本大震災が発生 帰国後、被災地に腰を据えて教育に携わる

震災で甚大な被害を受けた岩手県上閉伊郡大槌町で、2011年、キャリア教育を行うNPO「カタリバ」が、学習支援を行うコラボ・スクール「大槌臨学舎」を開設した。コラボ・スクールとは、震災で自宅や塾など落ち着いて勉強する場を失った子どもたちに、「地震のせいで将来の夢をあきらめた」という悔しい思いを抱いてほしくないと立ち上げた放課後学校。140人の中学生が通う同学舎に、芳岡さんは講師として勤務している。

「協力隊に参加していなければ、北海道を出ることなく、地元で教員になっていたと思う」

芳岡さんが協力隊に興味を持ったのは中学生のころ。途上国で活動する青年の姿をテレビで見て、「彼のようなキラキラした大人になりたい。いつか参加しよう」と思ったのがきっかけだった。その思いは次第に具体化。「キラキラした大人になったら、今度は自分が子どもたちに『こんな大人になりたい』という希望を与えたい」と、教員になる夢を抱き、教育大学に入学した。

「協力隊に興味はあるが、性格上、一度教員になったら教え子を置いて行くことはできないだろう」と、大学を卒業すると同時に協力隊に応募。理数科教師として、モザンビークの中高生を対象に、物理を教えることとなる。

配属先学校は生徒数6000人のマンモス校。芳岡さんは実験を中心に、生徒たちの興味を引き出す授業づくりを目指した。

1クラスの生徒数は100人。彼ら全員の理解を得る授業を行うことは容易でなかった。授業がわからないことで苦手意識を持ち、「勉強が嫌い」という生徒も多数。しかし、ペットボトルやストローなど身近なものを使って楽しい実験を行う芳岡さんは、たちまち人気者に。授業後、実験室にいると生徒たちが気軽に訪ねて来るようになった。

「選べる職業も少ないのに、何のために勉強をするの？」。胸のうちを明かす子どもたちに、芳岡さんは「勉強は、苦手なものや壁に向かう姿勢を育てるもの」と、勉強の大切さ、面白さを真摯に語って聞かせた。

その思いに応えるように、生徒たちの勉強に対する姿勢にも変化が。わからなかった点を質問しに来る生徒、もっと深く学びたいと申し出る生徒も現れるようになった。芳岡さんは放課後に補習を行うなどして対応した。

こうして、充実した活動を行っていた11年3月11日、東日本大震災が発生。

自宅にテレビや通信機器のなかった芳岡さんは、翌日「日本で大変な地震が起きたらしいが、お前の家族は大丈夫なのか？」と同僚に声を掛けられたが、初めは何を言っているのかわからなかったという。職員室のテレビで、仙台空港の飛行機が津波で流されている映像が目に入り、言葉を失った。

「しばらくはJICA事務所に問い合わせても誰も詳細がわからない状態でした。被災地に駆けつけられないことがもどかしかった」

伸ばしていた髪の毛を切って売ったお金を寄付するなど、現地でできる限りの支援を行ったが、もどかしさは消えない。それでも、帰国という選択肢を選ぶことはなかった。

「モザンビークの子どもたちを中途半端な状態で置いて帰国するのも、何か違う気がした」と、葛藤しながらも任期をまっとう。

帰国すると、同期ボランティアの仲間と共に被災地を訪問。そこで出合ったのが、現在勤める大槌臨学舎だった。「復興を支える未来のリーダーを東北の地から輩出するために、子どもたちの無限の可能性を引き出す」という理念に共感し、芳岡さんは12年4月から講師として同学舎に勤めることに。

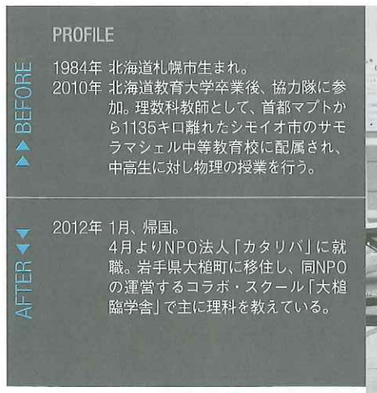
生徒たちは皆、被災者。家族や親戚、友人を失った子も少なくない。

「彼らが心に抱くものは、話を聞いて吐き出させてあげようとか、力になってあげようなんて言えるレベルではない。ただ、モザンビークでもそうしていたように、何かあったら必ず手を差し延べたいし、話がしたいと思ってくれたときには全力で受け止めたい」

その思いから、芳岡さんは職員室に戻ることはほとんどなく、なるべく教室にいるようにしている。また必ず定時よりも早く学舎に出勤し、遅くまで残る。今では、子どもたちから恋愛、友人関係、家庭の問題、将来への不安や夢など、さまざまな相談を受けるように。取材当日も休日だったが、芳岡さんは当然のように出勤していた。

「僕が休んでいる間に、子どもたちが何か話したくなったら、勉強に関する質問をしに来たら……と考えると、居ても立ってもいられなくて。24時間、子どもたちのことを考えているような状態ですが、そういう先生になりたいと思っていたので、とても楽しいですよ」

学校の教員になり、日本の教育現場に一石を投じたいという思いは持ち続けているが、今は、「大槌の子どもたちがどんな大人になるのか見守っていきたい」と、住民票も大槌に移し、腰を据える決意を固めている。



PROFILE

BEFORE

1984年 北海道札幌市生まれ。
2010年 北海道教育大学卒業後、協力隊に参加。理数科教師として、首都マプトから1135キロ離れたシモイオ市のサモラマシェル中等教育校に配属され、中高生に対し物理の授業を行う。

AFTER

2012年 1月、帰国。
4月よりNPO法人「カタリバ」に就職。岩手県大槌町に移住し、同NPOの運営するコラボ・スクール「大槌臨学舎」で主に理科を教えている。

「生徒との関係づくりに力を入れるだけでなく、授業づくりも極めたい」と、「大槌臨学舎」で生徒たちに理科を教える芳岡さん（中央）

モザンビークのサモラマシェル中等教育校での物理の授業風景。身近なもので応用できる実験器具を用いた授業を心がけた（中央が芳岡さん）